

## 教科指導 “めあて” の重要性和評価活動

～ゴールがわからずに走れるか？～

授業の始めに “めあて（目標）” を示す。これはごく当たり前のことであり、「山梨スタンダード」においても明記されている事項です。

ところが、授業を参観すると、時に “めあて（目標）” が全く示されていなかったり、示されていて「これは “めあて（目標）” なのか？」と思わざるを得ないようなものだったりすることがあります。

“めあて（目標）” の示し方は決まったやり方があるわけではないので一概には言えませんが、とにかくそれを示さないで授業を進めるのは、子どもたちにとってはたいへん困ることだと思います。

例えば、短距離走をする場合、ゴールを示さずに、「とにかく走れ！」と言って走らせた場合、子どもたちは一生懸命に走れるでしょうか。“めあて（目標）” を示さずに授業を進めるのはこれと同じことだと思います。ゴールが決まっているから一生懸命に走ることができるのです。その達成に向けて、よりよい走り方を学んでいくのが学習だと思います。

本時の授業で、子どもたちにとって何ができたか、いいのか、またわかったらいいのかが “めあて（目標）” だと思います。本時の学習のゴールを示すということです。

では、“めあて（目標）” はどう示したらよいのでしょうか。私の考えでは、今日の授業で何ができるようになればよいのか、またわかればよいのかを具体的に示すことだと思います。しかも、できるだけわかりやすく示すことが大事です。

私が実際に観た授業でいえば、例えば、算数の授業で、「式や図や言葉を使って説明することで、平

均について理解することができる。」と示していたのはとてもわかりやすいと思いました。

ところが、「文字と式についてたしかめよう」というような示し方も見受けられます。これは、「何ができれば、またわかればよいのか」というよりも、「今日は何々をします」という授業内容の提示ではないかと思うのです。今日やる内容はわかるのですが、これでは、いったい自分はその何ができるようになればよいのか、またわかればよいのかのかわかりにくいのです。先ほどの短距離走の例でいえば「今日は走ります。」と言っているのと同じですね。

“めあて（目標）” の示し方については、ぜひ校内研等で取り上げていただき、共通認識をしていたけるとありがたいと思います。

次に、子どもたち自身の授業評価についてです。外してはならない評価項目は、「本時の “めあて（目標）” が達成できたかどうか」です。

例えば、算数で「～の計算の仕方がわかる」という “めあて（目標）” を掲げているにもかかわらず、授業終わりの評価項目が「積極的に発言できたか」とか、「グループでの話し合いに参加できたか」というようなものであると、子どもたちは混乱します。本時でいったい何ができればよかったのかがあいまいになってしまいます。態度面の評価も大事ですが、しっかり分けて評価しないと、子どもたちの本時の “めあて（目標）” に対する意識が薄れ、本時で一番力を付けなければならないことが達成できなかったなどということにもなりかねません。

どのような状態になれば目標が達成できたのかが、児童・生徒自身によくわかる表し方をすることが大事です。つまり、“めあて（目標）” に対する評価項目を明確にすることが、子どもたちの学力を向上さ

せる重要な要素だと思います。

例えば、前述の「式や図や言葉を使って説明することで、平均について理解することができる」という“めあて（目標）”であれば、評価項目は、「図や式や言葉を使って説明できたか」「その結果、平均について理解することができたか」がメインになります。また、社会科で「ヨーロッパの文化の共通性と多様性についてわかる」という“めあて（目標）”であれば、「共通性が理解できたか」「多様性が理解できたか」が評価項目になります。共に目標が明確なので、評価項目も明確になります。

そして、その評価を児童生徒自身が、いつでも振り返ることができ、それを次の学習に役立てることができれば、よりよいものになります。そのような力を“メタ認知能力”とも言います。自分自身の学習過程を俯瞰して眺めることができる力です。以前の学習において、自分はこのように考えて理解することができたのだと、自分を客観的に見つめることができるようになると、自主的な学びの力が育ちます。その力をつけるために考案された評価法の一つに“OPPA（一枚ポートフォリオ評価）”がありますので、参考にしてみるのもよいかと思います。

また、“指導と評価の一体化”という言葉がありますが、これは児童生徒の評価を教員自らの指導に対する評価として活用する（一体化する）ことであり、非常に重要なことです。

例えば、“めあて（目標）”に対して、子どもたちの達成度がよくなかった場合、それは子どもたちの質が良くないと解釈するのではなく、自分の指導が良くなかったと反省するということです。先ほど述べた“OPPA”は、それを行う非常に優れた評価法だと思います。

お医者さんが、患者に対して「あなたの症状はとても重いです。それはあなたの問題です。私の処方の問題ではありません。」とは決して言いません。「あなたの症状に適した治療を施します」と言って、病を治すのがお医者さんの仕事です。

さて、教員はどうでしょうか？ 自分の指導の未熟さを子どもたちのせいにしては、専門職としては未熟ですね。子どもたちの理解が不足しているのは、自分の指導の問題であると考え、指導法を工夫することが、よい教師への道だと思います。そんな教師に教わる子どもたちは幸せだと思います。

明確な“めあて（目標）”の提示と、目標に準拠した評価を行うこと、そしてその結果を授業改善に役立てていくこと、これが授業の基本です。子どもたちにとって「わかる」喜びは何物にも代えがたい財産になります。それは、向上心に溢れた先生方だからこそできることなのです。

市川三郷町 教育長 渡井 渡

### 学習指導と学習評価のPDCAサイクル

○ 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要。

**指導と評価の一体化**

